■田中啓爾 人文地理学を主導。地理教育論にも功績があり、近代日本の地理学を振興、多くの人材を育てた。

たなかけいじ

内閣発足・・・1885＝ 東京府牛込区で生まれる。

帝国憲法発布1889＝ 4歳：

福岡県上毛郡三毛門村で育ち、

日清戦争始・1894＝ 9歳：

日清戦争終・1895＝10歳：村立三毛門小学校を卒業。

日比谷公園・1903＝18歳：

日露戦争終・1905＝20歳：

韓国反日暴動1907＝22歳：福岡県師範学校を卒業し、_東京高等師範学校本科地理歴史部に入学。

_歴史学の三宅米吉と地理学の山崎直方の感化を受け、

明治天皇没・1912＝27歳：卒業し、長崎県師範学校教諭となる。

第一次大戦始1914＝29歳：結婚。

21ヶ条要求・1915＝30歳：東京高等師範学校付属中学校講師になるとともに、_さらに同校研究科で学び、

民本主義・・・1916＝31歳：_卒業して、東京高等師範学校助教諭となる。

大暴落・・・1920＝35歳：_教諭に昇格後、文部省在外研究員として、米・英・独・仏に留学。W.M.デーヴィスやヴィダル=ドゥ=ラ=ブ
ラーシュ、A.ベンクら当時の一流の地理学者に学び、

原敬首相暗殺1921＝36歳：

水平社結成・1922＝37歳：ブリュッセルでの万国地質会議に参加して、

関東大震災・1923＝38歳：「独立科学としての地理学」。***帰国し、東京高等師範学校教授(地理学)に就任。前任の山崎直方や辻村太郎の地形学に対し、地誌学を主として、フィールドワークが重要な方法である事を説き、実証して行く一方、中等教員(地理科)検定試験委員となり、敗戦まで続け、地理教育界にも多大な影響を与える。**

護憲三派圧勝1924＝39歳：外務省の命を受け、対支文化事業の一環として、支那各地を地理学研究視察旅行。

治安維持法・1925＝40歳：(地理学評論)に_論文「横浜の地理学的考察」「甲府盆地」を発表。

円本時代始・1926＝41歳：東京での第3回汎太平洋学術会議に委員として参加。

金融恐慌・・・1927＝42歳：_立正大学教授を兼任。論文「日本の地理区」発表、最初の著書「多摩御陵附近の地誌」は三宅米吉が高評価。

共産党事件・1928＝43歳：著書「日本地理」、_執筆した最初の教科書「中等日本地理」、以後10年間、中等学校対象に15本の教科書。

世界恐慌・・・1929＝44歳：著書「地理教育に関する論文集」、恩地孝四郎絵「日本の旅」。***全国中等学校地理歴史科教員協議会を会長代理として主催するなど、地理教師に対する講習会・講演会にも多く出席して地理教育論を説き、「地理教育に関する論文集」にまとめられるが、特に郷土教育に重きを置いたその理論が熱烈に歓迎され、一般向けに書かれた「我等の国土」はベストセラーになるほどの人気。高等師範学校に付設された東京文科大学の助教諭に就任、直後に教授の山崎直方が死去したため、事実上、地理学の主任となる。**

海軍軍縮条約1930＝45歳：恩地孝四郎絵「世界の旅」。朝鮮総督府から普通学校用地理教科書編集を委嘱され、朝鮮全土を視察。_東京高等師範学校地理学会を(大塚地理学会)と改組し会長。中央日本の海岸平野に関する論文2本を発表、

満州事変・・・1931＝46歳

国際連盟脱退1933＝48歳：論文「朝鮮の人文地誌学的研究」では南北性の軸を主張、著書「日本の地理区」。論文「支那における政治・文化の中心地の推移について」では地域の中心地が軸と主張。_大著「地理学論文集」に集成され、さらに1本加えた三部作で、山麓・高地・平野の三大地域分化を論じる。

芥川直木賞始1935＝50歳：東京市視学委員(4年間)。ケバ式の「日本地図」刊行。_この年まで3年間「大塚地理学会論文集」6冊、

日中戦争始・1937＝52歳：ケバ式の「外国地図」刊行。_東京文科大学教授に昇格。この年まで「大塚地理学会報」を7冊刊行後、

健保+総動員 1938＝53歳：_季刊雑誌{地理}を発刊、多数の門弟が論文を発表する機会をつくり、

第二次大戦始1939＝54歳：論文「支那の地域区分」を発表。学術研究会議会員となり、敗戦まで続ける。全国中等学校地理歴史科教員協議会副会長として運営にあたる。

大政翼賛会・1940＝55歳

日米開戦・・・1941＝56歳：「東亜を中心としたる亜細亜地理」刊行。支那国定教科書地理科の編集を委嘱される(2年間)。

創価学会検挙1943＝58歳：論文「郷土の観察」の実行方法論。_季刊雑誌{地理}はこの年まで続けた。

年金+総武装 1944＝59歳：論文「関東地方の風土と健民生活」、

敗戦・・・1945＝60歳：東京中野の自宅が空襲で焼失し、神奈川県足柄下郡に疎開。

新憲法公布・1946＝61歳

新憲法施行・1947＝62歳：国立公園中央委員会委員(5年間)。***論文「総合科学としての地理学」を発表。東京文科大学を退官。講師就任以来、実質主任教授の役割をしてきた立正大学教授となり、地理学教室をさらに発展させて行く。**

樞東裁判決・1948＝63歳：「新版我等の国土」刊行、

三大事件・・・1949＝64歳：「それらをまとめた著書「地理学の本質と原理」を刊行。ユニークな「東京都新誌」刊行。

朝鮮戦争始・1950＝65歳：「郷土のしらべ方」「続・地理学論文集」刊行。この年、ようやく疎開先から東京に戻る。

独立回復・・・1951＝66歳：「高等地図」「人文地理」刊行。国立公園審議会委員(10年間)。

メデー事件・1952＝67歳：論文「東京を中心とした地位層」。以後3年_日本地理学会会長に推され、

55年体制始・1955＝70歳：論文「地誌論」。「地誌学的総合研究の一方法 川崎市の地位層」で、東京教育大学から理学博士号。

なべ底不況・1957＝72歳：論文「東京の地位層」を発表。_「塩および魚の移入路 鉄道開通前の内陸交通」刊行。

インサントマン・1958＝73歳：「地理的総合研究～川崎市と東京江東地区」刊行、

安保闘争・・・1960＝75歳：立正大学人文科学研究所長(5年間)、

全国総合計画1962＝77歳：「最新高等地図」刊行。論文「消象と未象」など、_旺盛な研究活動を続け、

東京リビア 1964＝79歳：「新世界地図」監修。

大学紛争始・1965＝80歳：「第三地理学論文集」刊行。立正大学教授を退職するも、講師として留まり、応用地理学研究のために欧米18カ国を視察旅行、

いざなぎ景気1966＝81歳：

美濃部都知事1967＝82歳：私書版で「欧米所見」をまとめ、

石油ショック1973＝88歳：「中国大地図」刊行。_地理学関係蔵書を立正大学に寄贈し、

クアランプール事件1975＝90歳：「第三地理学論文集」出版目前に、急性心不全により、没した。

インターネット近藤裕章「田中啓爾の戦前期における地理教育観」、**「日本地理学人物事典(近代編1)」**、